

連歌・俳諧において句を用意すること

廣木一人

1 はじめに

連歌の文芸としての性格が当座の付合の妙にあつたことは言うまでもない。そこに座の文芸、会席の文芸などと呼ばれる要因があつた。しかし、実際の場で間髪を入れず、句が次々と詠まれる保証はなかつた。初心であればその妙に達することはむずかしかつたはずである。

そこで、常日頃の修行が必要とされた。その修行の方法の一つは、連歌付合のための基本的な知識である古典、さらにはその古典から抽出された寄合を学び、記憶することであつた。連歌愛好者にとつて古典を具体的に付合として使えるように身にしみこませておくことは、欠くことのできないことであつた。

古典をよく学ぶべきであるということはどの連歌学書にも見えることであるが、宗長は『連歌比況集』⁽¹⁾の中で、連歌における古典勉強と和歌でのそれとの相違を城責めに譬えて次のように述べている。

連歌と歌との難易を申さば、歌は題をとりて起臥て案じ、又抄

物をも見合てよむ物也。連歌は烈座して、人の句に我付、わが句に人付る物なれば、物を見るにも及ばず。油断しては不_レ可_レ叶物也。たとへば、歌は城責をせんがごとし。城の切岸へ付てかへり、壁尺(の)木などを結て、物の具ぬぎ置て、折を待ちてせむる物なり。連歌は打出て合戦するがごとし。難易此中に。能々工夫すべし。

また、常識的な連想を常に働かせるというありきたりとも言える態度も必要である。二条良基は『僻連抄』⁽²⁾で、

見る様にこまれる所もなく、月とあらば山の秋風とも、花とあらば峰の霞とも、かやうの物をちとも働かさで、景氣眺望を見る様に有_レ興て付くるも子細なし。また、秋といふ句に春、野といふに山、朝といふに夕、かやうに引違_{ひきちが}へて付くるも一の_{じつ}体也。

などと述べている。

先学の作品を見、みずから、作句の修行もしなければなかつたであらう。連歌が付合によるものであることからすれば、厳密には作

句の修行は実際の連歌会席でしかなし得ないものであり、したがって、

ただ堪能に練習して、座功を積むよりほかの稽古はあるべからず。

という『僻連抄』の教えは至極当然のことと言えるが、しかし、そうであっても、会席に出る機会に限られているであろうから、日々は一人で作句を試みねばならなかったはずである。

後の時代のものであるが、宗牧はこの点に関して『当風連歌秘事』⁽³⁾の中で、「連歌は朝夕工夫すべき事歟」という間に次のように答えている。

前句なく候共、山川・草木・風雪・山風・雲鳥・獸物に付、朝夕一句を作り候はば、次第次第に句体も工夫のみに入、句数も出来すべし、是、宗砌より宗祇伝、又、兼載・宗長・宗碩、何も伝給ふをも、或時、宗長公へ此道を尋申候へば、如_レ此しめし給ふと也。

連歌愛好者がこのような修行を積むことが必須となれば、おのずから多くの先学の句が頭に入り、さらには自分の「工夫」した句も蓄えられるようになったことと思われる。ましてや、会席の直前には古典の復習も含めて、特に集中して準備・工夫をしておかなければならなかった。

岩松尚純の『連歌会席式』⁽⁴⁾には、

其朝に至ては、古詩古歌などを吟味して、心を高く澄し、偏

に三昧に入ごとく成べし。

とあり、近世連歌に大きな影響を与えた応其の『無言抄』⁽⁵⁾には、

其席に望事ゆめく聊爾におもふべからず。前の夕よりこゝろをしづめ、終夜古哥物語等の詞を思ひつらね、内外の書籍和漢の古事を心にしがひ披見し、工夫して早旦より衣裳をかひつくるひ出座有べし。

とある。

ここで述べられている「工夫して」が具体的にどのようなことを意味するのか判然としないが、前に「詞を思ひつらね」とあることから鑑みれば、句作を工夫して、ということであろう。この「工夫」という事柄は『連歌会席式』にも、

連歌の工夫を専らにして余力あらば抄物なども見侍るべし。とあり、猪苗代兼載の『梅春抄』⁽⁶⁾にも、

会の筈に出る時は、身を清して衣をととのへ、心に実をなし、古人の秀歌を案じ出し、おなじく古人の名句を工夫し、とある。

古典を復習し、先賢の句を見直すことは勿論であるが、さらにそれを参考に自分自身の句をもあれこれ試みておくように、という教えなのに違いない。作句を試みておくことについては、『肖柏伝書』⁽⁷⁾に二日前に連歌会の案内をもらったならば、として、

連衆の方へも、一兩日前に案内候へば、一日双紙をも見、翌日は一句だちの、百も二百もめづらしきことを遊し置候へば、た

れぐも秀逸を被_レ召候也。

とある。このような準備が連歌会席に臨む上で必要とされたのである。

2 孕句・手帳

承応二年（一六五三）成の俳諧「紅梅千句」⁽⁸⁾第五百韻第九十一、
安静の句に、

当座をもらみ句といふ連歌して 安静

というものがある。「孕句」は前もって用意しておいた句という意味である。支考著『十論為弁抄』⁽⁹⁾に見える

行灯の火口を脇へふりむけて

馬に戻せときる物をかす

或人の方より此句評を望れしに、是は慥に孕句ならん。前の
行灯はあばれたる台所に夜ふけてさびしき姿なれば、馬の居所
さらになし。

という逸話からは、孕句があるまじき手段であるとの通念があった
ことが窺われる。ただし、発句に関してであるが、『去来抄』⁽¹⁰⁾で、
風毛の句を去来が批判して、

かくのごとき句は、口を開けば出づるものなり。こころみに作
りて見せん。題を出されよ。町、すなはち「露」といふ。「露
落ちて襟こそばゆき木陰哉」。「菊」といふ。「菊咲いて屋根の

かざりや山ばたけ」と、十題十句、言下に賦し、「もし、孕み
句の疑ひもあらん。一題を乞うて十句せん」。町、「砧」とい
ふ。「娘より姫の音よわき砧哉」「乗懸のねむりをさます砧哉」
といふをはじめ、十句筆をおかせず。

と風毛の句程度のものは即座にできることを吹聴しているが、こ
では孕句は、よくなされたことが前提となっている。

芭蕉はやはり発句についてであるが、『三冊子』⁽¹¹⁾に、

また曰く「人の方に行くに、発句心に持ち行く事あり。趣
向・季の取合せ、障りなき事を考ふべし。句作りは残すべし。

孕句出でたるは、出づる所うるはしからず」となり。

という言葉を残している。「孕句出でたるは」云々は孕句が出され
たように思われてしまうのは、ということとで、先に「発句心に持ち
行く事あり」とあることから、これは孕句を完全に否定しているも
のではない。

芭蕉が孕句について言及しているのは他に見つかからないが、類似
した意義の語として「手帳」という言葉は多く口に乗せている。ま
ず、書簡を早い方から挙げておきたい。

① 「元禄三年九月十二日曾良宛」

此度、ひさご集ぜより出申候。世間五句付の病甚敷、手
帳がちに成、をもたく成候故、一等くつろげ候間、御覽被_レ成、
猶御工夫可_レ被_レ成候。

② 「元禄五年五月七日去来宛」

此方俳諧之体、屋敷町・裏屋・背戸屋・辻番・寺かたまで、点取はやり候。尤、点者共之為には悦にて可有御座候へ共、さて浅ましく成下り候。中々新しみなど、かろみの詮儀おもひもよらず、随分耳に立事、むつかしき手帳をこしらへ、磔・獄門、巻くに云散らし、あるは古き姿に手おもく、句作一円きかれぬ事にて御座候。

③「元禄七年二月二十五日許六宛」

「関の足輕」、能比合之奇作に候。過れば手帳の部に落候。世に鳴もの、三つ物、惣而地句等、皆手帳の外は三歳兒童の作意ほどもうごかず候。町もの、拵の俳諧にも我党五三人は見あき候へども、いまだ爰ヲ専と句を拵候者共も歴々相見え候。能句をうるさがる心ざし感心可有事にや。(略)野坡が三つ物は、去秋より愚風に移り、いまだうゝ敷てさぐり足にかゝり侍れ共、年来の功少増り、器量邪風に立越候故見所多く、惣而の第三、手帳の場を打なぐりたる、一つの手柄故、是中の品の上の定に落付候。(略)みの如行が三つ物はかるみを底に置たるなるべし。惣而の第三は手帳の部にありといへ共、世上につらを出す風雅の罪、ゆるし置候。

④「元禄七年六月二十四日杉風宛」

『別座鋪』、門人不残驚、もはや手帳にあぐみ候折節、如レ此あるべき時節なりと大手を打て感心致候。

俳論からも引用しておきたい。次は『去来抄』に見えるものであ

る。

舟に煩ふ西国の馬 彦根の句

許六試みの点を乞ひける時、この句を長をかけたなり。先師に伺ふに、先師曰く「いまは手帳らしき句も嫌ひ侍る。是らの句、手帳なり。長あるべからず」となり。かつて上京の時、問ひて曰く「この句いかなるところ手帳に侍るや」。先師曰く「船の中にて馬の煩ふ事はいふべし。『西国の馬』とまでは、よくこしらへたるものなり」となん。

弓張の角さし出だす月の雲 去来

去来問ひて曰く「この句も手帳なるべきや」。先師曰く「手帳ならず。雲も角も弓張月も、いはねば一句きこえず」。

「手帳」とは『俳文学大辞典』によれば、「手帳俳諧」の略。付合を前もって用意して手帳に記しておくことからきた語。観念的で奇警な付句表現に対し批判的という」ということである。また、『連句辞典』の「手帳」の項には「手帳俳諧」(孕句)ともいう」とある。「孕句」の方は『俳文学大辞典』の項では「会席で即座に作るのではなく、句の浮かばぬ場合の用意に前もって用意しておいた句」とされている。

「手帳」と「孕句」は会席前に句を用意しておくことという原義からは確かに同類の語であろう。しかし、芭蕉の用語においては「手帳」はもはやその原義からずれてきている。その語の形容として幾度も「拵える」と使われているように、「手帳」は不自然に巧

んだ句、『去来抄』の例からは、不自然に語句を取り合わせた句、などというのが芭蕉のその語に含ませた意義である。あらかじめ作り置いたものであるかどうかは大した問題ではないのであろう。

芭蕉がこのような意味で「手帳」の語を用いたことが、所謂「軽み」の主張と軌を一にしていることにも、「手帳」の語義を理解するためには注意を払わなければならない。書簡①でも既に「手帳がちに成、をもたく成候故」と述べられ、そのことが確認できる。②③は「軽み」論を述べた著名な書簡である。

孕句の方は先にも言及したように、芭蕉は絶対的な否定はしていない。このことから芭蕉が前もって句を用意しておくこと自体を問題にしているのではないことが分かる。

そもそも、芭蕉が「手帳」論をもって「軽み」をよしとしたようなことは、二条良基の連歌論においても見られることであつた。最初期の『僻連抄』でも、

詞細く具足少なからむ連歌は、一座の妨に及ぶべからず。詞強く景物多き連歌をたびたび返されぬれば、風情を失ひて、更に寄所なし。かやうの人はまことの魔障なるべし。

と類似の主張をしているし、「軽」という語自体を使つての論も、

『筑波問答』に、

初心のほど、ゆめ／＼万葉以下の古き事を好み給ふべからず。たゞ、あさ／＼としたる句のやす／＼としたるを、詞優しく句がるにし給ふべきなり。何とがな面白からんと案じ給ふ事、ゆ

め／＼あるべからず。如何に沈思し給ふとも、よきはあるまじきなり。かる／＼とし給ふとも、さのみ悪き事のみにては侍るまじ。

と、特に初心者に対してではあるが、言及されており、『九州問答』には一般論として、「連歌の詞はいかやうなるをよきと申し候べきや」という問に対して、

○先づ、浮き／＼と優しき詞を軽々とすべし。沈みたるやうなる詞、むさ／＼と聞こゆるをばせぬ事なり。

とし、「脇句」については、

○脇句は発句を請けて軽々とすべし。心などたち入りたる事はなし。

とある。良基における「地連歌」の重要性への主張も含めて、このような連歌・俳諧史に通底する觀念からも芭蕉が「孕句」ではなく、「手帳」を批判したのは当然であつたと言えよう。

3 発句の用意

少なくとも芭蕉が発句に関しては孕句と呼べるようなものを容認していたことは、次の『去来抄』の逸話からも判明する。

先師曰く「今夜、初めて正秀亭に会す。珍客なれば、発句は我なるべしと、兼ねて覚悟すべき事なり。その上、発句と乞はば、秀拙を選ばず早く出だすべき事なり。一夜のほど幾ばくかある。

汝^{なんぢ}が発句に時を移さば、今宵の会むなしからん。無風雅の至りなり。

発句は連歌百句の内唯一、⁽¹⁹⁾当座の景に即して詠むべきものであった。『僻連抄』にも、

発句に折節の景物^{けいぶつそぶ}背きたるは返す返す口惜しき事也。ことに覺悟すべし。景物の宗^{むね}とあるはよき也。

と述べられている。そうであれば、他の句はともかく発句こそ当座に詠むべきであるのが建前であつたはずである。宗牧は『当風連歌秘事』の中で「発句は前に案じ侍るべきか。又、時に望て仕候歟。如何」という問に対して次のように答えている。

発句は、当意の気色の撰様、座中の体、庭前の有様、色々様々の景気共侍れば、更兼て難叶。只当意則妙を可^レ本にや。

しかしながら、宗牧はこの後に次のように言葉を継いでいることに注目する必要がある。

乍^レ去、兼て四季四節山川草木の景を案じ到て、当意の景色ばかりを仕替事、故実也。千句・万句の発句は兼て案じをき候事、肝要なり。

先の記述は発句の本来的性格を説いたもので、作句に当たつての実際は後者の言にある、ということなのであろう。このことは前引の『僻連抄』でも、

昼、夜の発句、ゆめゆめすべからず^{但し、明月の良辰にはこれ許す}。夜は昼の句する事も時々あるべし。

とあることからすれば、類似した用意の仕方があつたことが察せられるのである。

このように発句を会席の前にあらかじめ用意しておくことは、古くからの習いであつたらしい。次は頓阿の『井蛙抄』⁽²⁰⁾に見えるものである。

故宗匠云、民部卿入道被^レ申しは、「歌会に人のもとへ行には、連歌発句一二案じて、何人何木何船様のつねの賦物にあて、用意する也。会のすゑざまに、俄に連歌すべしなどいふ事あるに、そゝろに発句を案じて、人にまたれなどすべからず」と被^レ申しき。

「故宗匠」は二条為世（一二五〇—一三三八）、「民部卿入道」は藤原為家（一一九八—一二七五）である。この逸話が史実であれば、十三世紀後半には既にこのような習いがあつたことになる。少なくとも『井蛙抄』成立期である十四世紀中頃、つまりは良基の時代にはこのようなことが語られていたのである。

時代が下がるが、宗祇に仮託された『初心抄』⁽²¹⁾には、

発句などの事、当座にてさす事候間、さ様の時は不^レ及^レ力発句をする事にて候。それは其時の当座の鉢又天氣などを見つろひてする事候。さやうに候へば、当座に出来たる発句と聞こえて面白く候。たくみたる発句は古句^{ふるく}案じたる心^{こころ}ばへ見えて、其興なく候。

などである。「当座にてさす事候間」とは、急に発句を所望される

時がある、ということ、これはその折には、という注意である。「さ様の時は」云々は、その時のために、あらかじめ句を用意しておいて、それをあたかも咄嗟に作ったように振舞え、と言うのである。結局、「当座に出来たる発句と聞こえ」るのがよいとしているが、これは先述しているごとくそれが発句の建前であつたということである。同時代の連歌論書『肖柏伝書』では次のようにあつて、現実的対応が示されている。

惣而、連歌興行のことは、其所の宗匠の方へ、五日以前に案内を申とかや。然者、発句などをも頼み申などと侍れば、思案する物也。当座などの事は、自然客来已下、俄なる興行の時の事にて候。定日会、或立願、或月並み・祝言・祈禱など、其砌にさし候へば、発句も遅くなり、其に付て禁句なども候也。脇・第三をそくなりて、句などもとどこほり候へば、終日の調子違候也。いかにも以前より被_レ仰合_二侍らんとぞ。

『井蛙抄』に記録されたような實際に関しては、『実隆公記』⁽²²⁾明応四年六月二十五日の条に、次のようにあるのが参考になる。

早朝今日御発句御談合、愚存分申入之、今日一日百韻有之云々、このように実隆が月次連歌会のために、後土御門天皇の発句の相談に預かるということは常のことであつたと思われる。文明十八年四月二十三日の条にも、

晩頭依召参内、明後日御連哥御発句被仰談、愚存分粗申入了退、出、

とある。これは翌々日の二十五日に催された千句連歌に関わるもので、幾分特殊であるが、この折には普通の千句連歌と相違して、同時に百韻連歌を十座に分かれて興行していることから、一般的な連歌会に準じて捉えてよいのであろう。

明応四年九月二十七日の条には、

抑去廿五日御発句余分在之、可被遊之由勅定、卅句被遊之、ともある。これだけの記事からは、発句が二十五日当座に作られたという可能性も考えられるが、やはり、その日より前に幾つか発句が作られ、実隆なりの意見によつて二十五日には用いられなかつた発句を、ということなのだと思われる。

次の記事は徳川幕府の柳営連歌会に關してのもので、連歌会としては極めて特殊ではあるが、ただし、発句を用意しておくように手配することについては、習慣的なやり方を踏襲していると言えるものである。

御会日何日と定りぬれば先宗匠仕へき者を召てその旨仰あるへき事

御発句のこと此時に仰あるへき事

但御発句御所様御自作に遊はさる、歟又は御作代を宗匠に仰付らる、歟又は宗匠に発句奉るへき由仰ある歟何れにもこの時仰下さるへき事（『御連歌晴之御会次第略』⁽²³⁾）

題が与えられていたような千句連歌の場合は、和歌の兼題と同様に、あらかじめ発句を作っておくことは当然のことであつた。『当

『風連歌秘事』に「千句万句の発句は兼て案じをき候事、肝要なり」とあつたことは既に引いた。同類書と思われる『宗養より聞書』⁽²⁴⁾では、

千句の発句などには、久布案じをきたる句もよろしくおもしろく候、

と述べられている。

『初心抄』には次のような記事が見える。

千句などの発句にあたり候はば、やすき発句を一案じ候て、事かけ候はば、其をすべき心を持て、其間に逗留候へば、別而一かどある発句を案じ候てする事候。さ様に候はねば、発句出来候はぬ程には心さはぎて、たゞの連歌などもせられず候。是一の古事にて候。

必ずとは述べられていないが、発句を用意しておくことが実際上、有用であるというのである。

次の記事は『石山月見記』⁽²⁵⁾に記録された「石山千句」に関するものである。

宗養法師。紹巴法師。これも同聴のともがらなれば。いざなひ侍りしに。いたづらに日ををくらむも心うし。かの源氏のまのあたりにて。十百韻の連歌をと申せしかば。不堪のうへ老懐いかゞとおもひながら。驥の尾につくべきよし申せしに。然らば発句の題には。かのものがたりの目録をと申て。若菜の発句を申出し侍りしかば。をのくその心ばせをおもひめぐらし。十

の発句をさだめて。ことし天文廿四年八月十四日におもひたち輿をならべ侍る。

千句連歌では、やはりこのように発句は会席の前に作りおくのが習いであつたのである。

もう一例挙げると、次は十七世紀初頭成の『三湖抄』⁽²⁶⁾の記述である。

千句月次独吟^{どくぎん}などの発句は数日工夫^{くふう}思案^{しあん}をまはしたる躰可然^{たう}当座^{たう}の発句などはかねてたくみたるやうなる作意^{さうい}は面白からず

ここでは千句だけでなく、月次連歌でも発句を用意しておくことが一般であることに言及している。

また、連歌には、はじめに参加者が一通り一度ずつ詠むという一巡^{いちせん}（順）という習いがあった。この一巡は、中世のある時期からはあらかじめ参加者の自宅に回して作り置くことが多くなつたらしい。いつからこのようなことが行われるようになったかは判然としないが、『当風連歌秘事』には、

只今京都には、兼載の風より以来、宗長・宗碩以来、発句等出来候へば、五、三日以前より、一順を文箱に入て、人衆の次々へ送り侍る也。

と記されている。一巡が連歌会当座以前に作られるならば、発句が当座ということと関わりなく詠まれるのは言うまでもないことである。⁽²⁷⁾ 発句以外は、一巡が自分の所に回ってきた時に前句を見て作るのであるから、その場においては当座ということになり、何日も

何時間も前に前句と無関係に作り置くこととは違うが、十分な時間が与えられ、先達などに相談もできるという点では本来の連歌のあり方とは相違する。『当風連歌秘事』には前引部分に続けて、

然間、何も好士の宿へ持参して談合する也。殊更、初心遅口の人は、俄案ずる事難^し叶故、前広にその沙汰^{さた}あるべし。

とあり、俳諧であるが、北村季吟の『俳諧会法』⁽²⁸⁾には一巡の作法がより具体的に、

一順・再篇等の句、宗匠にうかゞひ候時は、詠草に其前句を書て、我付句を其次に二句書付て、見せ候べし。

と示されている。

そもそも一巡が当座で詠まれても『当風連歌秘事』に、

昔は一順を式三番^{しき}にたとへて、いつもある事を申沙汰候と云々とあるようなことであつたならば、それほど珍しい独創的な句を詠む必要はなかつたということで、句をあらかじめ用意しておくことと実態としてはあまり変わらない。

このように、あらかじめ作り置いた句ということであれば、既に一度公表した句を再び使うことさえあつたことも必然の結果と言えるかも知れない。同書には「一趣向をも、発句に一度、付句に一度づつは不^し苦と也」として、次のような逸話が伝えられている。

宗碩、上京の笹屋が本の会に、

吹むすびふきとく風の柳哉

と侍りて、次の日、宗長に此発句を語り給へば、是をこそ晴の

発句とは可^し申候。只の連歌にてはあたら事成と、返々讀給ふ也。然に次の年、飛鳥井家に御会侍し時、発句を宗碩へさし給しに、この柳の発句を出し給へば、公家・武家、聞及し輩、此発句殊勝と吟詠あるに、脇より有人さしよりて、是は笹屋が許にて被^{まか}遊候を御失念候か、と申ければ、碩公耳にも聞入れずましませば、彼者手を失侍ると也。さて又、他人の句は趣向を不^し可^し取事也。

ただし、心敬に仮託された『馬上集』⁽²⁹⁾では、同心の発句をうっかり詠んでしまったことについて、

愚句を二度口外する事は。知恵の浅きよりあやまる事なれは。

そのつみのつたなきのみ也。

という悔いが記されており、手放しで承認できることではなかつた。

4 付句の用意

発句が当座の前に作られていることが多々あつたことは前記のごとくであるが、付句の場合はどうか。冒頭に述べたように、連歌という文芸の本質が付合の妙にあることはいうまでもなく、そうであれば、前句が提示されていないのに、付句を作るということは常識的には考えにくいことである。しかし、発句に関して引いた『当風連歌秘事』では、「発句は前に案^{まへ}じ侍るべきか。又、時に望て仕候歟。如何」という問に対して、まず、

答云、平句は兼而作置、前句に随て付行物にて候か。

と述べている。前引したように発句に對しては、「只当意則妙を可」本にや」と答え、平句に關しては「兼而作置」として、俳諧でいう「孕句」をそれほど問題にしていなかったのである。

幕末（天保七年）の俳諧作法書であるが、活齋是網著『俳諧仕様帳二編』⁽³⁰⁾には次のような「孕句」に關しての言がある。

会席に出やうと思ふに孕句を沢山にこしらへ置てよくそらに覚えてをるじや前日などの急拵は忘るゝものゆゑ常々目に見耳に聞く事はよいはいかいと思ふ事を長い句と短い句にゆるりと案じて拵ておくじやさて会席にのぞんだ時我が句が九句か十句もあらば席にて一二句考後はそのはらみ句でうまくそこへはめるがよいじや身熟（未熟―引用者注）な人のくるしさうに云出す句毎のたび／＼にかうがよいかあゝがよいかと文台のかたへ向つて相談するのも見苦敷あたりの人の邪魔にもなればそれよりはその孕句でさら／＼と出来てしまふが双方ともに都合よければ兎角に達者のつくまではこの孕句といふ事もしておかにならぬ事じやしかしその孕句は一句立のよくわかつてどこへもひろくつくやうにこしらへおくが第一じや

この書では、以下、具体的な例を引いて孕句の方法を説くが、ここに見えるようなことは、連歌においても会席に臨む上での現実的心構えとしてあつたことと思われるのである。それは先に取り上げた芭蕉周辺においても同じことであつたであらう。

次の記述は『僻連抄』のものである。

或人の、発句も聞かで、脇の句付けたる事ありき。これは秘事にてあれども、嫌物を聞きて発句は聞かずとも、付くる事、子細あるべからず。所詮、物の名にて、松風とも、庭の草ともとむれば、てにはのたがはぬ也。かやうの事、末学は知り難し。仍つて注之。⁽³¹⁾

このようなことができるのであれば、脇句をあらかじめ用意して置くことが可能であつたということであらう。

次は同じ良基の『九州問答』中の記事である。「周阿が連歌に、多く当座にてせぬ連歌の兼日に案じたと覚え候ふ句多く候ひし。かやうにも仕り候ふべきやらん」という今川了俊の問に對する答である。

答へて云はく、歌にも貫之は一首を二十日に詠むなど申すことの侍らば、連歌も兼ねてよくよく工夫せんこと子細なきか。但し、一句を丸ながら作り置きたらんは、いかにも上句のてにはも違ひ、一句も退くべきなり。周阿は大略兼日より下作りをして、てにはばかりを取り直してし候ひしと覚え候ふ。⁽³²⁾

「てにはばかりを取り直して」という言は、前引の『僻連抄』の「物の名にて、松風とも、庭の草ともとむれば、てにはのたがはぬ也」という見解に對應するものである。脇句の場合は体言で留めるという一般的な作り方をしておけば、前句（発句）にうまく付く、というのであり、他の付句の場合は「てには」の工夫でその条件を

満たすことができるのである。

勿論、本来は当座での付けこそが理想で、良基は続けて、

これは当座にて出来し候はんよりは無下に劣りたる事なり。但し、細かに作り入りてしたるは当座は人の面白がる事なり。さのみ同じ風情なれば、次第に聞き劣りのするなり。真実当座の胸中より出でたらんには劣るべきなり。但し兼日よりも作り置くことも数奇の所謂なり。堪能にあらずは、また風情を作り入ることもかなふまじきにや。これも最上にはあらねども、一句面白からんは一体にてさのみ嫌ふべきにあらず。当時は作り句をする程の人もなきなり。

と述べてはいる。しかし、「堪能」でなければなし得ないこととして、付句をあらかじめ作り置くことのできる力量は認めているのである。次の逸話は、撰政（良基）家の千句連歌において、最高点を取ろうと救済と周阿が、前句・付句をあらかじめ用意しておき、成功させたという『馬上集』に伝えられたものである。

周阿救済が宿庵に夜更人しつまりて忍行。ひそかに申けるは。扱も世に人多といへとも。此道に名をしられたる者は兩人也。今度千句惣長の事如何思召給ふそ。可申合心中にて夜陰に参たり。若惣長あらは当代は所知得。末代には名を残し給ふへし。（略）貴辺と愚身と心得計案したらん句に。なとか惣長ならさらん。愚身に定而執筆をさしあてらるへし。（略）諸人句を出す共。指合ありとてかへし侍るへし。

池をも田にや作りなすらん

と申すへし。此句に兼て付すましたまへと。兩人ともに名を得たるほどの好士。一夜かほと談合して付侍れは。なとかあしかるへき。

水鳥のをしねかりほす秋の日に

両者申定而退出す。則撰政家の千句に参て。救済は宗匠なれば。貴天満座とも軽らす。（略）あんの如く三百韻めの執筆を周阿にさせしに。周阿上座して執筆をつかふまつり。三ノ面六句目に件の句を出す。（略）

ここは付合二句を用意しておくという話で、付句一句だけの用意と幾分相違するが、周阿が「池をも」云々という前句をその前の句がない段階で作り置いたという点では同じことである。

この逸話の真偽は不明である。しかし、少なくともこの書が書かれた時代に救済・周阿のような堪能がなし得たことと認識されていたのであろうし、このように句をあらかじめ作り置いて付合を企むことがあり得ることとして想定されてはいたのである。

前引した『肖柏伝書』で、

連衆の方へも、一兩日前に案内候へば、一日双紙をも見、翌日は一句だちの、百も二百もめづらしきことを遊し置候へば、たれども秀逸を被し召候也。

と述べられた折の「百句も二百も」作り置く「一句だち」の句というものも、『九州問答』に言及された周阿のような方法、『馬上集』

のような付句作句の方法としてあり得ることを前提としてのものに
 違いない。

『九州問答』にいう「作り句」というものが、ことさら巧みをこ
 らした芭蕉の言う「手帳」のごときものであったとすれば、『梵燈
 庵返答書』に周阿の句について、

近来摂政家の仰にも。こと棄くたけて長高句なし。或は作連歌。
 或はこまかなる連歌。心によしと思ひしめて。てにをはには働
 はてをよしと申侍しなり。

とあるように、「作連歌」として否定的に見られたであろうが、句
 の用意という点に関してはそれほど特異なこととは見なされてい
 なかったと思われるのである。

5 おわりに

本稿の冒頭に述べたように、そもそも句作の修行は怠りなくすべ
 きことであつたのである。そうであれば、句を用意して連歌会席に
 臨むことを必要悪とのみ言い立ててよいかも疑問になつてくる。

『九州問答』の中で、「古連歌をちとてにはななどを變へてする人の
 候ふ。いかやうに候ふべきやらん」という問に対して、「名句を取
 る事返すゝあさましき恥なり」とはするものの、

但し、連歌はたゞ文字一つにて新あたしくなる事なり。上手は常
 の連歌をてにはにて違ちがへて新しく聞こゆるやうにする、一つの

体なり。⁽³⁴⁾

と述べていることは、句を用意しておくことへの肯定と読み取れる
 し、『了俊下草』の⁽³⁵⁾

救済ごときは大成の将聖也。其外は一方を得たる哉。周阿は
 連歌を兼日案じをきてよくとり合候し也。近日は又何の方も不
 叶歟。無念此事候。

という言は、前述したような周阿の方法の全面的評価とは言えない
 ものの、周阿のように句を作り置いておくという手段を一つの方法
 として認めているのである。

発句についてであるが、『宗養書とめ』⁽³⁶⁾には、

上手の発句を初心の時学で可習事、第一也。夫をあまり同こ、
 ろ詞はあし候。⁽³⁷⁾ 発句に云、

(例句四句略)

是は、いかにも初心の時、宗祇の句を専順うつし、宗祇の句を
 宗長うつし、次第に劫を積りて我と悟り知、珍しき心を尋出し、
 世に名を取給ふ也。

ともある。また、平句に関しては、伝宗祇著『初学用捨抄』⁽³⁸⁾に、
 たゞ心の稽古(の)至所は心安き座にて心静に案じ、あるひは
 連々前句を作候て、五句も十句も憚ある時、(又はね覺などに
 作捨)、工夫して行まゝに、実の面白に天然と至物にて候。常
 住の工夫なくしては、連歌に成給候はん人は、かならずつまづ
 き給べし。

と述べられている。これらを見ると、少なくとも初心の時は、連歌会席に臨むに当たっては、それをそのまま用いないにしても、先達の句を参考にしつつ工夫した多くの句を準備しておくべきであったことが分かる。

勿論、句をあらかじめ作り置いておくことで付合の妙味というものの、また、連歌が本来もっていたはずの当座性というものが欠けることは懸念された。心敬はその懸念を次のように吐露している。

中古には付合とて、大方兼てより付るさまを定めきて、前句の心・てにをはの沙汰はなく、ただ取合々々待る計の句のみなる歟。(『老のくりごと』⁽³⁸⁾)

心敬は付合における親句・疎句を論じ、疎句の方が「気高う、遙遠」であると『ささめごと』⁽³⁹⁾で述べているが、しかし、一方では

○灯庵主の句、前句の心をば忘れ、ただわが句のみおもしろくかざりたて、前句の眼をば失しなへり。其比より諸人ひとへに前の句の心をば尋ず、ただ並べをき待ると見えたり。此道は前の句にわが句の玉しるはあるべく哉。(『所々返答』⁽⁴⁰⁾)

○中つ頃よりこの方の好士は、一句の上に理知られて、麗しきを秀逸とのみ取置、前句の付ざまをば忘れ侍るやらん。(『ささめごと』)

と、連歌というものが付合によって成り立つことを忘れてはならないことも注意している。疎句ということと一句立とは違うということであろう。寄合のごときものだけで「取合」わせて親句の付合と

することも、一句立て疎句のごとく付けることも否定しているのであるが、これらの注意も、当時、句をあらかじめ用意してそれを考へもなしに用いる者が多くいたことが一つの前提になったの言と思われるのである。

そうは言っても、心敬は日々の修行をないがしろにはしていない。『心敬法印庭訓』⁽⁴¹⁾では、「連歌は、かねてたしなみ、朝夕修行工夫して」と、修行を重ねることの必要を説いている。当然、それを実践したはずの心敬の胸中には数限りない句の蓄積があったに違いないのである。

『当風連歌秘事』では次のように心敬の逸話を引いて、自分自身の句であれば、二、三度は同じ句を用いてよいと述べられている。

我句之儀は、前句さへ相替ば、両三度迄は不_レ苦也。心敬会席に、有人、

露も律もちりぐの暮 と申に、

秋とふく萩の上風山おろし

と付候也。然に、十日ばかり過てある御会に、

おなじ教へをあまたにぞきく と云句に、

秋と吹萩のうはかせ山風

と付給也。是をも人々申候へば、前句かはりて殊よく付候歟と覺申候。少しも不_レ苦候也。

もつとも、先達の句をそのまま用いるようなことは慎むべきで、近世、例えば瀬川昌坪は『道の枝折』⁽⁴²⁾の中で、

未熟の人おほくは古連歌おほえて口にあるてにをははかり直し出す事あり甚あしく詞は古くとも心を引かへて用たらんこそ本意ならめ

と注意しているが、これは同類・等類の望ましくないこととされたことから当然のことであつた。

心敬の方は『心敬法印庭訓』で、先に引いた部分に引き続いて、その座にてはかるぐとすべし。平生たしなむ人の句は、口にまかせてするやうなれども、よくく聞ゆるもの也。ただの時たしなまぬ人の、たしなむ風情みせんとして、汗を流しうつ臥しあふのき案ずるは、かたはらいたくこそあれ、数寄とは見えずとも述べている。結局は、修行の結果、蓄積した胸中の句を土台とし、新たな句、もしくは新たに詠まれたと感じさせるような句が立ち現れるようであることを最上としたのであろう。句は日頃多く用意すべきであり、その上でそれらの句を捨てることのできる者こそが真の堪能とされたのだと思う。それは、

先師曰く「今の俳諧は日頃に工夫を経て、席に臨んで氣先を以て吐くべし。心頭に落とすべからず」となり。〔去来抄〕と述べた芭蕉においても同じであつたに違いない。

注

- (1) 中世の文学『連歌論集四』（三弥井書店・平成2年4月）
- (2) 日本古典文学全集『連歌論集能楽論集俳論集』。以下の引用も同書。
- (3) 中世の文学『連歌論集四』（前掲）。以下の引用も同書。
- (4) 鶴崎裕雄「帝塚山学院短期大学研究年報」28・昭和55年12月
- (5) 日本古典全集
- (6) 中世の文学『連歌論集四』（前掲）
- (7) 中世の文学『連歌論集四』（前掲）。以下の引用も同書。
- (8) 古典俳文学大系『貞門俳諧集一』
- (9) 古典俳文学大系『蕉門俳諧集二』
- (10) 新編日本古典文学全集『連歌論集能楽論集俳論集』。以下の引用も同書。
- (11) 新編日本古典文学全集『連歌論集能楽論集俳論集』
- (12) 今榮藏『芭蕉書簡大成』（角川書店・平成17年10月）
- (13) 角川書店・平成7年10月
- (14) 東京堂出版・昭和61年6月
- (15) 日本古典文学大系『連歌論集俳論集』
- (16) 「九州問答」注釈Ⅰ（『緑岡詞林』27・平成16年4月）
- (17) 「九州問答」注釈Ⅱ（『緑岡詞林』28・平成17年3月）
- (18) 良基の論が会席における平句に関して、特に場を重視した上でのもので、芭蕉の論が発句を含めた作品のあり方そのものに対するものでもあつたことは留意する必要があるが、芭蕉の「輕み」論が付合の方法から生まれた可能性は考慮すべきであろう。
- (19) 脇句も発句に添えるようにということから、結果としては当座の景に即することになる。
- (20) 『歌論歌学集成第十巻』（三弥井書店・平成11年5月）
- (21) 中世の文学『連歌論集二』（三弥井書店・昭和57年11月）。以下の引用も同書。
- (22) 続群書類従完成会
- (23) 静嘉堂文庫藏
- (24) 古典文庫『連歌論新集三』

- (25) 群書類従27
- (26) 『連歌資料集2』（ゆまに書房・昭和52年7月）
- (27) 『当風連歌秘事』では引用箇所のすぐ後に「当座発句」という語が出てき、発句が当座に詠まれることの方が異例であったことが分かる。
- (28) 古典文庫『季吟俳論集』
- (29) 続群書類従17下。以下の引用も同書。
- (30) 校註俳文学大系『作法編第一』
- (31) 『僻連抄』の改編本である『連理秘抄』ではこの部分を省いている。『僻連抄』が地下連歌師としての救済の教えが忠実に反映しているのに対し、より理想的な立場立っての改編だと考えられる。
- (32) 『九州問答』注釈Ⅰ（前掲）
- (33) 続群書類従17下
- (34) 『九州問答』注釈Ⅰ（前掲）
- (35) 古典文庫『良基連歌論集三』
- (36) 古典文庫『宗養連歌伝書集』
- (37) 中世の文学『連歌論集二』（前掲）
- (38) 中世の文学『連歌論集三』（三弥井書店・昭和60年7月）
- (39) 『歌論歌学集成第十一巻』（三弥井書店・平成13年7月）。以下の引用も同書。
- (40) 中世の文学『連歌論集三』（前掲）
- (41) 中世の文学『連歌論集三』（前掲）
- (42) 逢左文庫蔵。国文学研究資料館のマイクロフィルムによる。